音楽雑誌の記事

日本有数の音楽雑誌「音楽の友」に連載されているアマチュア・オーケストラ（＋合唱団）を紹介するコーナーで、ニューフィルが取り上げられました。右ページにその切り抜きを掲載してあります。
さらに、それとは全く関係なく、同時に発売となったやはり由緒ある雑誌「レコード芸術」にも、ニューフィルの演奏会に関する読者の投書が掲載されていましたので、その切り抜きも下に載せました。

読者投書箱

【投稿規定】1行19字詰でタテ書き、55行以内にまとめ、住所・氏名・年齢・職業を明記し、下記宛にお送りください。採用分には全国共通図書カードを進呈します。
〒162-8716　東京都新宿区神楽坂6-30
（株）音楽之友社　レコード芸術編集部「読者投書箱」係

アマチュア・オケの奮闘

■門馬光彦

なんとも充実した演奏会であった。こんなことを体験できるのはそうそうない。11月3日、末廣誠さんの指揮による仙台ニューフィルハーモニーの第55回定期演奏会が行なわれた。曲目はワーグナーの〈ジークフリートの葬送行進曲〉とブルックナーの交響曲第8番であった。

すばらしい演奏であったのだが、ブルックナーの前半楽章ではいささかまとまりに欠けていた。緊張のためかミスも目立った。しかし要所では引き締まった演奏で、第1楽章の終盤はわくわくさせられた。

後半楽章ではまとまりが取り戻され、第3楽章は本演奏会の白眉であった。ひたすらに美しい、美しい。ハープが現われるあの箇所はあまりにも美しく、ほんとうに身体が痺れてしまった。フル・オーケストラとなる部分は美しさ、迫力ともに兼ね備えられており、圧倒された。これぞブルックナーだ！　そしてコーダ、あまりにも美しいコーダ。その心地よい空間に身を委ねることができ、今まで感じたことのないような気持ちよさを味わった。最後の変ニ長調の和音は完璧で、自然と涙が零れた。この25分間はついぞ体験したことのない、そしてこれ以降味わえるかもわからない体験をした。

さて、第4楽章。正直言って、ブルックナーの第4楽章は苦手であった。わかってないなぁ、そんな奴がこれぞブルックナーなんて言うな、というブルックナー・ファンの声が聞こえてくる（私は大のマーラー・ファンである。やはりブルックナーとマーラーを両方愛するのは難しい）。しかしニューフィルと末廣さんはその魅力を教えてくれた。静謐な第3楽章の後、いきなり大迫力のオーケストラが登場する。アンサンブルは文句なしで、冒頭から圧倒された。場面は変わっても緊張感は途切れることはなく、そして〝闇に対する光の完全な勝利〟が訪れた。ブラヴォー!!

仙台ニューフィルはアマチュアであっても次々と大作に取り組み、第50回でもマーラーの交響曲第9番を演奏した。このときも指揮は末廣さんで、マーラー・ファンたる私は大きな期待を胸に聴きに行ったが、その期待を上回る名演であった。特に第4楽章がすばらしく、客席でただ涙を流すばかりであった。プロでもたいへんな大作をアマチュアのオーケストラが次々と取り上げ、しかも高水準の演奏を残す裏側にはたいへんな努力があることが容易に察せられる。次はショスタコーヴィチの第5番を取り上げるが、努力を惜しまぬ仙台ニューフィルハーモニーに、そして二度も名演を聴かせてくれた末廣誠さんに感謝の意と敬意を表する。

（仙台市青葉区　22歳　大学生）

「街の歌」改め

アマチュアオーケストラ&合唱団探訪

連載●第6回
仙台ニューフィルハーモニー管弦楽団

音楽は聴いて楽しむだけじゃない。「演奏こそわが人生！」。そんなアマチュア・オーケストラと合唱団のエネルギッシュな活動を紹介していきます。今回は東日本大震災を乗り越えさらなる歩みを進める仙台ニューフィルハーモニー管弦楽団。

仙台フィルハーモニー管弦楽団の前身を担った歴史あるオーケストラ

宮城県仙台市。東北の玄関として、仙台フィルハーモニー管弦楽団の拠点として、あるいは仙台国際音楽コンクールの開催地として「楽都」の名高い都市である。

仙台のオーケストラの歴史は彩りと紆余に満ちて深い。最古の楽団は1921年創設の東北大学交響楽団。その後いくつかの楽団が生まれあるいは消えた後の81年、仙台ニューフィルハーモニー管弦楽団（以下、ニューフィル）は生まれた。前身は73年創設のプロアマ混成団体「宮城フィルハーモニー管弦楽団」。この楽団は当初からプロ化を目指しており、79年にプロ・オケとして現在の仙台フィルへと進化の道を踏み出す。そこに加わらなかった宮城フィル団員によってアマチュアとして再出発したのがこの楽団である。

現在団員数約76人。年2回の定期演奏会と毎年末恒例の《第九》公演を軸に、ほぼ毎週火曜の夕方か（指揮者の都合によっては）土日にも練習を行う。特定の指導者をおかず、選曲も団員からの発案で決定し、仙台初演など珍しい曲にも意欲的。近年ではブリテン《ピーター・グライムズ》より〈4つの海の間奏曲〉などが注目された。

仙台市広瀬文化センターでのリハーサル（9月）。末廣誠の指揮で、深々として広がりのある音が紡ぎ出される。「団員は"楽器マニア"、"音楽マニア"含め充実のメンバーが揃うものの弦楽器は少々人数不足ぎみ」とのこと。豪華なことにエキストラとして仙台フィル団員が参加することもあるという

ニューフィル内広報として団員有志が「かいほうげん」なる8ページにわたる冊子を作成しており、その内容の濃さは瞠目ものだ。そんな団員の造詣の深さ、層の厚さは演奏の端々にも現れる。

去る11月3日に開催された「第55回定期演奏会」は、創立30周年記念公演としてブルックナー「交響曲第8番」がメイン。本来は2011年5月の定期公演で取り上げるはずだったものだが、東日本大震災直後のさまざまな状況から演奏会は中止となり、日常を取り戻すうちにニューフィル内から生まれた「同じプログラムを実現したい」との声に指揮者、末廣誠が応えたという。取材にうかがったのは9月、指揮者練習は2回目というがすでに相当の仕上がりを見せており、意志のこもった音運びからは演奏にかけるそれぞれの思いが伝わってくるようだった。すでに来年4月の公演に向け動き出しているニューフィルの幸多き発展に心を寄せつつ、さらなる躍進、そして当地の復興を祈りたい。

ブルックナーのシンフォニーでひときわ大きな存在感を放つホルン／テナーテューバ群。「うちのホルントップ、ちょっとすごいでしょ」との団長・熊谷仁氏（hrn）の言葉に大きく頷かされる。こんなふうに誇れる仲間の存在は大きなモティヴェーションの源だ

- 団体名：仙台ニューフィルハーモニー管弦楽団
- 創立：1981年
- 練習：毎週火曜日19～21時30分（演奏会の前には、土日に指揮者練習が入ることがある）、仙台市旭ヶ丘市民センター4階ホール他にて
- 会費：3,000円／月
- 団員数：76名
- 活動：前身は1973年にアマチュアとプロの混成で創立された「宮城フィル」。1981年にアマチュアのメンバーが中心になって現在の「仙台ニューフィル」となった
- 次回演奏会：〈日時〉2013年4月20日18時30分（予定）〈会場〉川内萩ホール（宮城県仙台市）〈出演〉山下一史（指揮）〈曲目〉シューマン：オペラ《ゲノフェーファ》序曲、ベートーヴェン：交響曲第1番、ショスタコーヴィチ：交響曲第5番
- 募集：ヴァイオリン、チェロ、コントラバス
- 問合せ：下記ホームページよりお問合せください
- URL：http://sendainewphil.client.jp/

この記事の取材は、9月22日の指揮者練習の時に行われましたが、一部に事実誤認があります。「かいほうげん」は毎号ほぼ「16ページ」ですし、創立30周年記念演奏会が本来行われるはずだったのは「2011年10月」です。